

(声明) 日本バプテスト連盟結成 40 周年に当たって

日本バプテスト連盟は、今年結成 40 周年を迎える。イスラエルの民が奴隷の地エジプトを脱出し、乳と蜜の流れるカナンに到達したのが 40 年目であった。連盟にとっても 40 年は一つの時の満ちる区切りであり、世代の代る節目であり、来たるべき時代を展望する時である。そして、何よりもこの 40 年は、幾多の誤りや罪にもかかわらず、イエス・キリストによって贖いとられ、はかり知れない賜物を与えられたわたしたちの 40 年である。この歩みがなければ、今日のわたしたちもなかった。それゆえに神の恵みを感謝し、これを想起しつつ、わたしたちの罪を告白する。この告白をわたしたちの次の新たな歩みのための出発点とすることによって、わたしたちは今後の連盟を、希望をもって展望し、神の導きを祈る。

神はイエス・キリストにおいてわたしたちを救いの歴史に招き入れ、神の子らとして下さる。神のこの一方的な恵みが教会の基盤である。連盟の歴史は、先立ち給う恵の神への応答の歴史であり、また応答のありかたが神によって問われる歴史でもある。この間、多くの先達の絶え間ない努力と捧げ物があった。また、米国南部バプテスト教会の援助を受けた。更に、「全日本にキリストの光を」との幻をかかげ、信条主義にとらわれないバプテストの諸教会の自由な協力伝道体としての実現を求めたことも憶えねばならない。これらのことについて、わたしたちは神に感謝したい。

しかし他方、1947 年の日本基督教団離脱、連盟結成に際して、わたしたちは連盟の信仰告白を自らの言葉で掘り下げ得ず、バプテストとしての教会観もあいまいであった。教団離脱時における問題は、1941 年の教団結成時における問題と相通じている。教団結成に参加したことは、国家権力の絶大な強制によるものではあったが、わたしたちの側も弱く、これに押流されたのも確かなことであった。「イエス・キリストは主である」というわたしたちの信仰告白は、天皇制と対峙することなく、個人的意識の内面にとどめられた。それによって神のみむねを歴史的に問うことを欠き、その結果、わたしたちはアジアへの日本の侵略戦争に加担した。また、教会の主はイエス・キリストであるにもかかわらず、わたしたちはわたしたち自身の手で神の教会を守らねばならないし、また守ることが出来ると考えたのであった。そして、わたしたちはこのような基本的な過ちを被害者意識によって受けとめ、実際的には加害者となった。わたしたちはこの誤りと罪を認め、悔い改める。

わたしたちはこの罪責告白と共に、今後の連盟の課題を展望し、豊かな神の恵みを証しする者でありたいと願う。

1. 「全日本にキリストに光を」

連盟は協力伝道体である。わたしたちは連盟の自給、自立の決断をなしたが、これは教会が神の恵みによってのみ生き、また成長するということを明確にするためにほかならない。わたしたちはすべての者に向けられたキリストの十字架の愚かさと弱さにおいてすべての者に力と恵みを与える神の福音を宣教する。今やわたしたちは、伝道の幻と勇気が与えられ、「全日本にキリストの光を」の第一歩として、「500 の教会・伝道所と5 万の信徒」という目標が示されている。それを担うことによって、わたしたちはまさに主にあって、伝道の主体となって行くのである。

2. 「イエスは主なり」

主告白は今日において社会的、政治的課題に直面せざるをえない状況にある。神ならぬものが神として拝される時、あらゆる場面において非人間化が起こってくる。それゆえ「ヤスクニ」において象徴される問題は、教会にとって信仰告白の根幹にかかわる問題提起である。私たちは生の全領域において改めて、「イエス・キリストは主である」ことを告白しなければならない。

3. 「和解の福音」

40 年を顧みる時、敗戦に至るまでの歴史に劣らず、わたしたちの歩みは沖縄と近隣のアジア諸国の民衆を差別し、貪る側に立つ歴史であった。この和解の福音は、とりわけ今日アジアの民衆との連帯の中で聞かねばならない。それによって、わたしたちは自国の経済的繁栄を無批判に受入れ、福音をもっぱら内面の平安として捕える誤りから自由にされる。それゆえに国外伝道を通して、わたしたちは相互に福音によって豊かにされ、また問われ、正される。

このようにして主が再び来られる日まで、主の命令に従い、神の世界宣教の業に参与することは、わたしたちに与えられる栄光である。願わくは、来る 40 年が、神がわたしたちを恵の道具として用い給う年月でありますように。

1987 年 8 月 28 日

日本バプテスト連盟第 41 回年次総会